

中高生の英語力アップのために

—文部科学省「英語教育実施状況調査」結果を考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：文部科学省が4月3日に発表した2015年度の「英語教育実施状況調査」についてどう考えますか。

A：(林明夫。以下略)文部科学省が、都道府県別に「英検 3 級程度」以上の中学 3 年生のパーセントと「英検準 2 級程度」以上の高校 3 年生のパーセントを調査して公表した結果は、現実のものとして真摯に受けとめ、中高生の英語力アップのために大いに役立てるべきです。

Q：高校3年生は群馬県が49.4%と全国一の結果となっています。群馬県が高校英語No.1になった理由は何だとお考えですか。

A：(1)太田市にある小学 1 年生から高校 3 年生まで国語と社会以外はすべて英語で指導する「群馬国際アカデミー」の影響と刺激が大きいのではないかと私は考えます。

(2)開倫塾の本部のある栃木県足利市の隣の群馬県太田市にある「群馬国際アカデミー」は、足利市の公立小中学校の英語教育による意味で大きな刺激を与えています。足利市内のすべての公立小中学校には ALT が配置され、中学校の英語の先生のほとんどがすべて英語による授業を数年前から行うようになりました。

(3)私も「群馬国際アカデミー」を何回も訪問し、多くのことを学ばせていただきました。

(4)隣の県の足利市がこれほど大きな影響を受けているのですから、同じ群馬県内にある中学校や高校は「群馬国際アカデミー」に負けまいと張り切らざるを得なくなったと思われます。

(5)ちなみに、同校の中学・高校部の校長は群馬県教育委員会の次長をなさった実力者の先生がお務めです。

(6)学校だけでなく、うすい学園をはじめとする学習塾の力も大きいと考えます。

(開倫塾も群馬県に 8 校舎ありますので、いくらかはお役に立っているのではとひそかに思っています。)

Q：中学3年生は千葉県が52.1%と全国一である理由は何だとお考えですか。

A：(1)中学・高校の先生方の努力と共に、千葉県の学習塾の先生方の努力の成果だと確信いたします。

(2)中学生や高校生の英語指導に対する千葉県の学習塾の先生方の熱心さと創意・工夫にはいつも頭が下がります。

(3)従来から通塾している中学 3 年生の英検 3 級全員合格は当たり前で、目の前の中学 3 年生の半数以上に英検準 2 級を取得させて高校に送り込む学習塾が数多くあるのが千葉県です。

Q：林さんは、この文部科学省の調査結果を踏まえ、これからの英語教育はどうあるべきと考えますか。

A：(1)グローバル化とデジタル化が急激に進む中でよく生きるためには、世界の共通語である英語によるコミュニケーション能力とワードやエクセルなどコンピュータのリテラシーを身に付けることが不可欠と考えます。

(2)日本においても、これからの英語教育は、「英語の教育」のみならず「英語による教育」の時代に入るべきと考えます。

(3)OECD のメンバーである先進諸国だけではなく、数多くの開発途上国でも小学 1 年生から週 3 ～ 5 時間、英語の授業が正規の教科としてあります。そして、小学 3 ～ 4 年生になると算数や社会、科学などの教科が英語によって教育されます。

(4)日本のように、小学 3 年生から英語を学び始め、高校 3 年生まで英語のみを学び続ける国は極めて少ないように私には思われます。多くの国では、1 ～ 2 年は英語の基礎を週に 3 ～ 5 時間集中的に学び、そのあとは「英語によって各教科」を学ぶことが普通です。日本が例外と言えます。

(5)以前にも紹介しましたが、インドの都市部では 50 % 以上、地方では 20 % 以上の小・中・高生が通う私立学校では、月に数米ドルの授業料ですべての教科が英語で行われています。貧困からの脱却のためには英語を身に付けること、そのためにすべての教科を英語で学ぶことと、パソコンの基礎を身に付けることが不可欠であると先生・保護者・子どもたちは考えています。

Q：何か参考になる本がありますか。

A：(1)一番のお勧めは、アンドレス・オッペンハイマー著、渡邊尚人訳「ラテンアメリカの教育戦略、急成長する新興国との比較」時事通信社、2014 年 12 月 10 日刊です。

(2)さすがピューリッツァー賞を受賞した調査報道ジャーナリストの著作です。ラテンアメリカ諸国の発展のために欠くことのできない教育はいかにあるべきかを求めて、フィンランド、シンガポール、インド、中国、韓国、イスラエルを訪問しました。各国の英語教育の実情も、ラテンアメリカ諸国と共によくわかります。

(3)世界の英語教育標準は 2 ～ 3 年間は「英語の教育」で、3 ～ 4 年目以降は「英語による教科教育」であること、日本は例外中の例外であることがよくわかります。

(4)オッペンハイマー氏の前著「米州救出、ラテンアメリカの危険な衰退と米国の憂鬱」時事通信社、2011 年 7 月 10 日刊をお読みでない方は、ぜひ合わせてお読みください。「英語による教育」の必要性がもっとよくご理解いただけます。

Q：「英語による教科教育」ですか。学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことがありますか。

A：(1)この世界標準の英語教育に合わせ、教育開発から「新中学問題集 数学 1 年」に引き続き「数学 2 年」「数学 3 年」の完全英語翻訳版が今春出版されました。

(2)英語の先生だけでなく、数学や理科の先生にもノートを取りながらこの 3 冊の英語版の数学問題集を学習していただきたく希望します。

- (3)その上で、今教えている中学生や高校生に、中学 1 年～ 3 年生の数学を英語で教えていただきたく希望します。
- (4)英語による中学 1 年～ 3 年生の数学の指導が終わったら、次に、英語による中学 1 年～ 3 年生の理科の指導にもぜひチャレンジすることをお願いいたします。
- (5)中学生で慣れてきたら、小学生や高校生にも「英語による教科教育」を行いましょう。
- (6)近くの大学の大学院に留学中の学生に英語による中学数学や中学理科の指導をお願いすることにもぜひご挑戦を。
- (7)可能であれば、JET プログラムなどで ALT として来日した外国人講師の先生を JET プログラム終了後に採用して、「英語による教科教育」を担当していただくこともお勧めです。ぜひご挑戦を。

Q：最後に一言どうぞ。

- A：(1)今月紹介する読めば必ずお役に立つ本の 1 冊目は、開倫塾の本部のある足利市にご家で一時お住まいであった「プラトン学園」の宝槻徹代表のご長男である宝槻泰伸先生の話題作、「強烈なオヤジが高校も塾も通わずに 3 人の息子を京都大学に放り込んだ話」徳間書店、2014 年 8 月 31 日刊です。
- (2)2 冊目は、同著「勉強嫌いほどハマる勉強法、子どもが勝手に学び出す!!宝槻家のストーリー活用術」PHP 研究所、2015 年 5 月 7 日刊です。
- (3)3 冊目は、「プラトン学園」副塾長であり、芥川賞の受賞作家である奥泉光著「プラトン学園」講談社文庫、講談社、2007 年 10 月 16 日刊です。
- (4)4 冊目は、貝原益軒著、石川謙校訂「養生訓、和俗童子訓」岩波文庫、岩波書店、1961 年 1 月 5 日刊です。後半の「和俗童子訓」は、「養生訓」ほどは読まれていないようですが、教育関係者必読の書と考えます。
- (5)(1)と(2)と(4)は、何のために学ぶのか、どのように学ぶのかなど教育を原点から考え直すときにとても参考になります。
- (6)最後に紹介するのは、コニカミノルタ取締役会議 議長の松崎正年氏著の「傍流革命 変革をつくり出せ」東洋経済新報社、2015 年 7 月 23 日刊です。小が大と戦う「ジャンルトップ戦略」は、学習塾、予備校、私立学校に最もふさわしいものです。ぜひ、ご一読を。

— 2016 年 4 月 15 日記 —